

豊岡 ミニムシ 商店街

撮影◎森日出夫

「豊岡商店街」

（鶴見区）

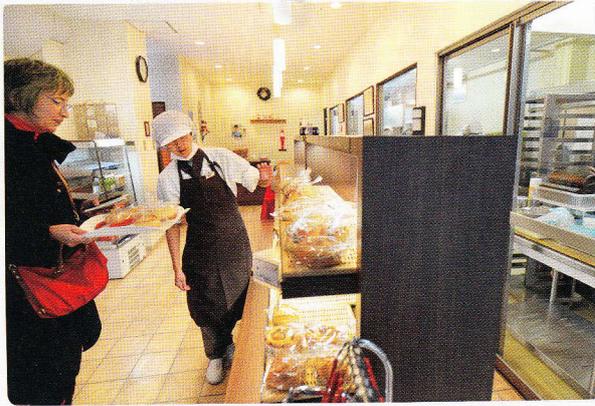
第38回

「商店街は面白い」

買い者・萩野アンの



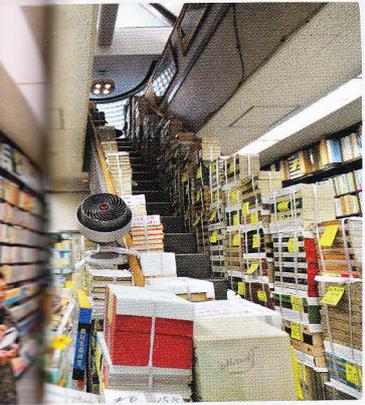
古書店「西田書店」の店内にて。アンの両脇がご主人の佐藤健二さんと奥様の純子さん。そして従業員の方々



「鶴見ふれあい館」に併設されている人気のパン屋「麦の家」。1日100種類以上の商品を作っている



「手彫りの判子、その材質の違い」などを教えていただいた「堀江千里堂」のご主人は、豊岡商店街協同組合の理事長



「西田書店」の展示ショーケース。限定本の世界に、「ミノムシ、欲しい」と長い間釘づけになったアンナさん、その結果は（本文参照）



「誰もが」気軽に「ふらっと」立ち寄れる場所づくりを目的とし、高齢者や障害者、地域の方の交流拠点となっている「鶴見ふれあい館」で記念撮影。手前右のご婦人が簡さん

JR 鶴見駅西口を右に曲がれば豊岡商店街だ。商店街理事長さんの店「堀江千里堂」で、街の由来を伺った。

商店街の一本道は總持寺に由来する。約百年前、寺が北陸から当地へ移転する際、トロッコで建設用の材木を運ぶために出来た道だ。總持寺は修行寺で観光とは縁が無く、門前町として栄えることは無かった。それでも自然発生的に飯屋や古着屋ができて商店街の形を成した。

堀江さんによると、豊岡は「ロケーション商売」。駅に近く、金融機関や医院が多いため人が集まりやすい。他方、駅前にはスーパーがあり横浜や川崎も近く、生鮮三品（肉屋、八百屋、魚屋）が無くなるのは早かった。

残った商店は、チェーン店を別にすれば、刃物屋、古本屋など昔ながらの個人商店だ。刃物の「鶴見利研」は販売だけではなく研いでくれる。店にあったハサミを使わせてもらった。紙を切るとシャキンといい音がした。

堀江さんの「千里堂」は印鑑の専門店だ。祖父は瓦版や浮世絵の版を削る版木屋だった。父は版木屋の小僧から判子屋に転身し、三代目の今に至る。

「判子屋は字を書けないと商売にならないですよ」

堀江さんはパソコンが主流の今も、手書きにこだわっている。個性のある判子はそれと見分けがつくため、安心して使ってもらえる。削るにはノミを用いる。道具は自分で「こさえる」、すなわち研いで厚みや角度を決める。

本ツゲや黒水牛など素材を見せてもらった。ワシントン条約で入手不可能となった象牙も、在庫が少しある。牙の根本は目が粗く、先端はキメが細かい。2本並べるとその差は歴然としていた。

「鶴見ふれあい館」は障害者の作業所とパン屋と喫茶スペースが成る。入り口では街のご婦人が手芸教室の真つ最中。奥には代表の簡さんが常駐している。香水の薫る素敵なマダムは85歳だ。

「10歳くらいはサバ読めますよ」
「まあ、嬉しいわ」

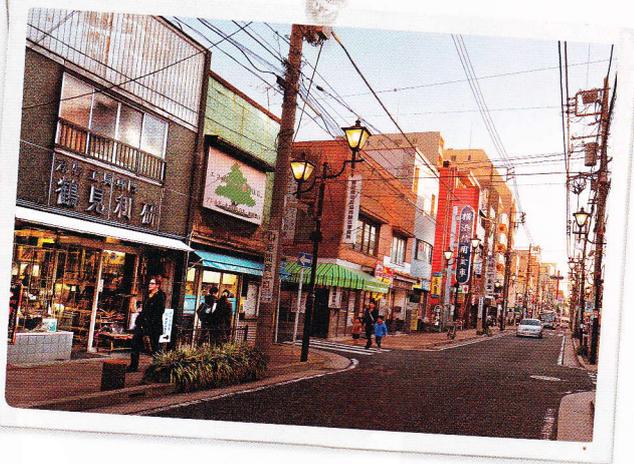
華やかな笑顔の陰には苦労が隠れていた。

豊岡にはシャッター通りになりかけた時期がある。心配した簡さんたちが横浜市のみち普請事業に応募して、「ふれあい館」の創設が決まった。市からの援助では足りず、一般の賛助金にも頼りながら、全員ボランティアで頑張った

地元で65年という内山ミシン商会店内にて。右が二代目の内山江史（たけし）さん、左が三代目になる雄太さん



「鶴見利研」、研ぎの名人の吉田さんに、包丁、ハサミ、おろし金など「切れ味」がいかに大事かを教えていただいた



JR 鶴見駅西口を利用する人たちが絶え間なく通っている「鶴見利研」前の豊岡商店街



いる。2年目でようやく家賃が払え、3年目の今年、ボランテアの交通費が出せるようになった。「ふれあい館」には自慢のトイレがある。100軒以上ある商店街に初めてできたそれは、車いす可、おむつ替え可。淡いピンクで統一されている。

「行ってらっしゃい」と送り出されて「西田書店」へ。壁という壁がみっちり本で埋まっている、東京・神田でも珍しいほどの本格派古書店だ。創業68年。強い分野は国文学、歴史、郷土史、宗教。總持寺が近くにある影響だという。店内のショーケースでは「限定本の世界」という展示をやっていた。

小島烏水うすいの『書齋の岳人』は、背表紙にミノムシを用いている。人が書齋にこもると、ミノムシが巢にこもるのを掛けてある。1冊に付き30匹を用い、限定100冊で3000匹が犠牲になった。表紙は木の皮で、目と手に優しい。価格は1万500円。「本が持つ人を選ぶんですよ」と二代目の佐藤さん。何度か出した手をつまみ結局引つ込めた。「鶴見利研」のショーケースも、限定本の世界に近い空間だ。板前

ている。壁には「岩田増太郎」や「長太郎」など作者銘の付いたハサミが作品のように飾られている。奥は研ぎ場だ。二代目の吉田さんは、よその商品でも「まんべんなく」研いでくれる。

銅のおろし金は5千円を超える。「これで下ろすと繊維がよく切れて美味しいですよ」これまた出した手をつまみ引つ込めた。

「内山ミシン商会」も65年以上続く老舗だ。30年ほど前は街に数軒あったというミシン屋は、今は内山さん一軒となった。店内に並んでいるのは家庭用や業務用のコンピュータミシンだが、修理のために訪れる人も少なくない。鶴見には80代や90代で昔の足踏みミシンを使っている人も健在なのだ。取材を終え、駅へ戻る途中で、思い切って「西田書店」に飛び込んだ。

「ミノムシ、下さい」ショーケースから取り出してもらっている間に気が付いた。価格は1万500円ではなく、10万5千円だった。ミノムシは再びショーケースに戻った。

本が持つ人を選ぶ。本よりも値段に選ばれなかった私は、再び駅を目指した。

荻野アンナ（おぎの・あんな）
横浜市出身、作家。慶応義塾大学文学部仏文科教授。1991年、『背負い水』で芥川賞受賞。
『アンナの工場観光』『ホラ吹きアンリの冒険』『蟹と彼と私』『働くアンナの一人っ子介護』『殴る女』『大震災 欲と仁義』『えろたま』など多数。